84 シャンティイ城と日本 （2021 年 10 月 21 日）

前回、17 世紀に日本の磁器がヨーロッパの王侯貴族に愛されたことをご紹介しました（https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100246922.pdf）が、実はこの話には続きがあります。ヨーロッパにおける日本や中国風の磁器への憧れは、磁器の制作への原動力になりました。

ヨーロッパでは、16 世紀末から中国磁器の模倣が始まり、1710 年にドイツのマイセンでヨーロッパで初となる硬質磁器の生産に成功しました。そして、当時の王侯貴族に好まれていたアジア趣味の磁器も作られるようになりました。

パリ郊外のシャンティイで作られた鉢や皿（写真）は、伊万里の柿右衛門様式を真似した磁器です。遠目に見ると、まるで本物の柿右衛門様式のように見えます。ただし、18 世紀前半のフランスでは硬質磁器を作るために必要不可欠なカオリンがまだ発見されていなかったため、カオリンを含まない粘土で作られた軟質磁器です。フランスではルーアン、サン=クルー、シャンティイ、初期のセーブルなどで軟質磁器が作られました。シャンティー窯は、1731 年にブルボン公ルイ=アンリ（1692-1740）によって作られ、約 70 年間にわたって軟質磁器を生産しました。シャンティイ窯で生産された磁器は、シャンティー城（コンデ美術館）やパリの装飾芸術美術館で見ることができます。日本で磁器と言えば硬質磁器のことで、軟質磁器は存在しません。硬質磁器に似せた軟質磁器を生み出して磁器を手に入れようとした努力から、当時のフランス人がどれほど強く日本や中国の磁器に憧れていたのかをうかがい知ることができます。

オーマル公アンリ=オルレアン（1822-1897）に後継ぎがいなかったため、オーマル公の死後に、シャンティイ城とそのコレクション全体がフランス学士院に遺贈されました。オーマル公の遺言により、コレクションは門外不出で、展示のレイアウトは手を加えずに 19 世紀当時の姿を残しています。今年、このシャンティイ城で、嬉しいニュースがありました。1975 年に盗難に遭って行方不明と

なっていた日本の漆器で作られた小ぶりな飾り箪笥が、45年以上の時を経てシャンティイ城に戻り、今年５月から再びシャンティイ城で展示されています。この箪笥がいつコンデ家のコレクションに加わったのかまだ明らかにされていませんが、東洋に関心が高かったブルボン公ルイ=アンリが蒐集したものかもしれません。

シャンティイ城は、兵庫県にある姫路城と姉妹城提携を結んでいます（1989年締結）。姫路城は、1993 年に日本で最初に世界遺産登録された遺産の一つです。別名「白鷺城」とも言われる美しい姿をしており、日本が誇る立派な城です。

シャンティイ城では、かつて日本の磁器に似せた軟質磁器が作られ、日本の漆器が蒐集されました。さらに日本の城と姉妹城提携をしています。シャンティイ城の歴史を紐解いてみると、いくつも日本とのつながりがあることが分かります。